

かくた ゆたか

角田 豊

文化学部 教授  
博士(教育学)／京都大学

ホームページ URL

<http://renjissen.kyokyo-u.ac.jp/teacher/kakuta/index.html>

## 主な研究業績

- 「学校臨床力を磨く事例検討の進め方—かかわり合いながら省察する教師のために—」2020, 創元社 (編著)
- 「子どもとの関係性を読み解く 教師のためのプロセスレコード —学校臨床力を磨く自己省察とグループ省察会—」2019, 金子書房 (編著)
- 「子どもを育む学校臨床力—多様性の時代の生徒指導 教育相談 特別支援—」2016, 創元社 (共著)
- 「共感体験とカウンセリング—共感できない体験をどうとらえ直すか—」1998, 福村出版
- 「プロセスレコードによる教師の省察とグループ省察会 —中堅中学教員によるプロセスレコードの具体例—」2018, 京都教育大学紀要, 133号, 101-115
- 「『学校臨床力』とプロセスレコードによる教師の省察」2017, 京都教育大学紀要, 131号, 1-15.
- 「『学校臨床力』の観点からみた教師の省察を深める事例研究会 —教職大学院における事例研究の実例—」2016, 京都教育大学紀要, 129号, 47-61.

## 研究テーマ Research theme

## 「共感についての臨床心理学的研究」と「教師の学校臨床力の向上」

## 概要 Overview

共感 (empathy) とは、対人理解において、基本となる概念です。カウンセリングや心理療法といった心理臨床の分野では、カウンセラー (セラピスト) の共感が重視され、研究がなされてきました。カウンセリングの分野では Rogers, C.R. が、また精神分析の分野では Kohut, H. がその代表といえます。他方で、発達心理学や人格心理学など、人格特性のひとつとして「共感性」を捉える立場もあり、質問紙を用いた研究や、母子観察などの調査研究が進められてきています。私は、臨床心理学を専門とし、上記の両面から共感について研究を行ってきました。自分自身のセラピストとしての経験からは、何が共感に役立つのか、あるいは阻むのかといった関心や、逆転移やイメージ体験も含めた領域をどのように生かすことが共感につながるのか、といったクライアント理解や治療関係の理解に関心が広がってきています。また、調査研究としては、共感経験尺度改訂版 (Empathic Experience Scale Revised : EESR) を開発し、人格の他の側面との関連を見る研究をしてきました。この尺度は、心理関係をはじめ看護領域の研究等に使用されることが多くなっています。

また、学校現場や教師との関わりが多く、現職教師らとの共同研究や、スクールカウンセリングや教師へのスーパーヴィジョンなどを行なってきました。こうした学校臨床においては、教師の児童生徒理解や対応のあり方について、心理臨床の知見を応用する研究を続けています。現在は、京都連合教職大学院の生徒指導力高度化コースの教員として京都産業大学から派遣されています。教師が子どもたちの心をいかに育んでいくか、その「かかわり合い」を教師自身がふり返って検討できる「事例研究会」や「プロセスレコード」を用いた自己省察やグループ省察会のあり方を研究しています。

## 応用分野 Application areas

教育相談 (カウンセリングの実際) や、生徒指導・キャリア教育・教育相談・特別支援に関する教師と児童生徒 (保護者) とのかかわり合いについての事例研究・グループ省察会といった教員研修の講師。共感や自己心理学をテーマにした研修の講師。

## 共同研究等へのニーズ Need for joint research

学校や教育センターなど学校教育にかかわる機関との共同研究。例えば、京都府内の公立小学校との共同プロジェクトとして、2018・2019年度に「プロセスレコードを使った教師と子どもとの人間関係のふり返り (省察)」を実施した。若手教員が担任している児童とのかかわり合いを、プロセスレコードによって自己省察し、さらにグループ省察会を実施して理科を深め、若手教員の学校臨床力の向上を目指した。